

オレイユ

パリ通信

有名になつた……とか、口角あれこれにすぎ去つてゆくパリの秋……。

家たちが枯葉のテラスで芸術の噂話に明け暮れる街。  
……そう、私が七年前、はじめてパリの土を踏んだ時は、まだアン・フォルメなどという無形の絵画が生まれなかつた頃だつた。イヤどこかの屋根裏で、キャンバスに絵具をやたらに、たきつけ  
ていた狂人みたいな画家が居たかも知れないが……。

リ見物に来たドイツ、イタリー、スペイン等々の旅行者たちが、マロニエの葉が散り出すと一夏の数々の夢をパリに残して、モンバルナス駅からサン・ラザール駅から、リオン駅からそれぞれの故国へ帰つてゆく。その同じ駅から今まで避暑を行つていたパリ人が帰つて来る。そしてパリの秋。旅行者の街から芸術家の街となるのである。

パリの秋は短い。マロニエの並木もアカシヤの並木も、落葉して黒く枯木のようになつて来る  
と、歩道をゆくパリジエヌの服装の色も、日一日と濃くなつて来る。古い街の建物がくすんだ灰  
色に見えて来ると、教会の鐘の音が、石の舗道に、枯木の枝に、ひんやりと冷たく響いて来る。や  
がて日の照らぬ重苦しい灰色の空が毎日つづいて、一夜ごとに夜霧の濃い街となるのである。

落葉の都

板  
谷  
房

